

あとがきにかえて

異文化はやっぱり身体で感じてこそ！

王 柳蘭

京大大学地域研究統合情報センター／京大大学白眉センター特定准教授

東南アジア・東アジアで移民研究をしてきた私がアフロ・ブラジルの伝統芸能・カポエイラのイベントの企画・運営になぜ関わったのか。カポエイラのワークショップが開催されてから1年半がすぎた。2014年9月に東京と京都で実技・実演も含めたワークショップを開催し、その記録をまとめ、編集しながら、われながら驚いてしまうのである。ブラジルには一度も行ったことがないのに、カポエイラについてはまったく知らなかったからである。好奇心のみで企画に関わり、動いてしまう自分をあらためて発見している。

この企画は編著者であるアンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマさんと荒川幸祐さんならびに多くの協力者によって実現可能となった。その詳細については、本報告書のなかで執筆者がさまざまな形で企画との関わりやそこで得られた体験について記述されているので、そちらをぜひ読んでいただきたい。

私は、その前年にたちあげた地域研究コンソーシアム(JCAS)の次世代ワークショップ枠の一つである「異文化・環境教育枠」の運営にコミットしていた。異文化を子どもたちに伝えていくツールは、机上の学問だけではあるまい。アカデミアを越えてNPOやさまざまな人と交わり、コミュニケーションしていくなかで、肌身で異文化を体験し経験できるプロジェクトを支援するのが目的であった。

結果はどうであっただろうか。当初の予想をはるかに上回り、子どもに異文化を伝えるという僭越な自己意識はまたたくまに消え去り、自分がカポエイラに惹きつけられたのであった。

2014年9月12日、平日の昼休み、京大大学稲盛財団記念館の中庭にて、ブラジルから招聘した3人の師範の方、ならびに日本各地から集まったカポエイラの実践者とともにオープニングが行われた。ライブで生の声が身体に響き渡っていく快感と同時に、カラダを絶妙かつリズムカルに動かしながら対になって踊る光景を目の当たりにした。その場には京大の研究者や事務職員、学生の方も立ち観されていた。企画準備の段階では、申請書に「抵抗と身体」をテーマに、頭でっか

ちな議論を展開していたが、「異文化はやっぱり身体で感じてこそ！」と痛感した瞬間であった。

実際、9月14日の最終日には二人の子どもを連れて、京都で行われた実演講習会にも参加し、マンツーマンで基本的なステップを教えてもらったり、演奏に使われる打楽器の解説をしてもらったりした。その後引き続き夕暮れの鴨川べりで行われたカポエイラに参加し、ビデオをまわした。わずかだが、貴重な異文化体験であった。

しかし、カポエイラが伝えるメッセージは深かった。東京・京都で開催されたワークショップでは、学術的に広がる多様かつ相互に関連するテーマについて議論された。黒人奴隷と抵抗する身体、アフロ・ブラジル文化とディアスポラ、人種と国民文化におけるアイデンティティの位相、女性の権利と社会運動、ポストコロニアル状況下における身体・音楽文化と異文化混雑、ノンバーバル・コミュニケーションが持ちうる可能性、宗教・音楽・儀礼・舞闘の交差、身体論とマイノリティ哲学等。カポエイラをめぐる歴史的な流れを踏まえつつ、ブラジルやアフリカという地域に限定したトピックに収束させていくのではなく、むしろ多角的かつ現代的な課題と展望について普遍的なテーマをシェアしつつ活発な議論が行われたのである。

あらためて振り返ると、こうした問題群は移民研究とも底辺では繋がっていたのである。地域の壁を越えて発見できる未知なる世界がある。ホザンジェラ・アラウージョ師範による「文化は壁を伝って流れ落ちる水のように、その水は境界線をすべてなぎ倒して、なきものにしてしまいます」という一言が印象的であった。ぜひ、将来はブラジルにも行ってみたい。好奇心がまた膨らんできた。

企画の裏方で頼りない部分もあったと思うが、多くのことを学ばせていただき、こうした機会を与えてくださった京大関係者の先生ならびに事務の方がたとカポエイラの仲間みなさんにお礼申し上げたい。

